

応答願イマス

辻仁成
Tsuji Hitonari



応答願イマス

著者

辻 仁成 ©1995 Hironari Tsuji

発行者

小田 啓之

発行所

株式会社思潮社

〒一六二 東京都新宿区市谷砂土原町三一十五

電話(三二六七)八一五三(営業) 八一四一(編集)

FAX(三二六七)八一四二

印刷所

相良整版・福田印刷

製本所

小高製本工業

発行日

一九九五年十一月一日

応答願イマス

辻仁成

思潮社

目次

I

サヨナラ二十世紀 8

はじめての子 10

宮廷の裏庭で、集められた主語が焼かれる 14

少女プシケ 18

俯瞰世界 20

II

もうすぐ五十歳 26

仏顔 30

言葉はキュークツ 34

動物を食べる時、僕は僕が動物であることを知る 44

サラヴァ 46

りあるわーるど 60

Ⅲ

風 74

愛があれば大丈夫 86

ピアノの耳 92

結局みんないつかは死ぬということを学ぶために今日を生きている 96

螺旋音階 100

Ⅳ

リバイガンズ 104

後書き 124

息吹に

I

サヨナラ二十世紀

何世紀も前から波は打ち寄せている

これから星が滅びるまで、打ちつづける

僕たちは、ふとある期間、この地球に宿った魂に過ぎない
無数の日々の中のほんの一時期を

あなたと暮らす

いつか僕たちのことを誰かが掘り起こすとしたら

笑顔で生きた美しい日々だけを見つけ出してほしい

言い合ったことや

憎み合ったことや

争ったことは忘却して

見つめ合った

慰め合った

助け合った

光りを放ち続ける瞬間だけを記憶する

あなたの子宮の温もりを

僕のペニスの固さを

はじめての子

父親になったら

お終いだとずっと思っていた

役目が終わるから

後はカマキリの雄みたいに食われるだけ

・

毎日せりあがってくるあいつの腹

そこで何が行われているのか

想像する

蛙の卵が分割していくように

あいつの腹の中でぶくぶくと

形が出来ていくわが子

しかし

生まれる前から生まれているわが子

宿命より以前に運命を生きているわが子

お前にはなんの迷いもないのだろう

父親になろうとしていることの責任を

僕が時々風の中にまき散らしてやりたくなるなんて

知らない方がよい

・

僕はあの僕なのに

夕日にさよならするのが好きだった僕

自転車に乗ってみんなのためにパンを買いにいった僕
チムチムリーチムチムリーチムチムチェリー

歌うのが好きだった僕

雌が

海に餌を食べに行く間

南極の風雪にさらされながら

何カ月もじっと

円陣を組んで

寒さと飢えを凌ぎ

卵を守る

雄の皇帝ペンギンたちより

僕は、してあげることができない

わが子

最初から不幸なわが子

お前は僕を呪うがよい

僕を罵るがよい

お前が出てきても僕は父親を拒否しよう

最初からお前は拒否されたわが子だ

遅くなるしかないわが子

救いは、母親の無垢なお前に対する愛だけだ

その先のことは

生まれてから考えればよい

・

テレビをつけると

自分の子供を食っている熊の父親が映っていた

食われる子熊の足が見えた

あいつが見ないように

僕は急いでチャンネルを変えた

宮廷の裏庭で、集められた主語が焼かれる

「宮庭の裏庭で、集められた主語が焼かれる」

耳栓を採す初夢を見た

本当は失ったのは言葉であつた

世界から言葉が無くなっているのに

誰も気がついていないという夢である

言葉を複雑にした王国と言葉を単純にした王国が

戦争もしないで

同じ領土の上に国を作っていた

だから私は両方に租税を納めなければいけなかった

ところで、無くした耳栓は片方だけなのだ

仕方なく一個だけ耳につめたが

半分だけ聞いてみるというわけにはいかなかった

驚くべきことに群衆は

そのとりとめもない言葉のやりとりにおいてもはや

『わたくしは』という主語を用いていなかった

宮廷の裏庭で、集められた主語が焼かれるのを私は見た

雲まで届く大きな黒煙

王様たちは円卓で詩的言語空間を論じている

どんなに小さな王国にも専制君主はいる

エリオットよ